

は日本と同じでしょうか)。

その二: 車輦も駅も清潔なこと。ニューヨークの地下鉄のような落書きは一つもありません。地下鉄といえば埃っぽかったり、特別なにおいが漂ったりしますが、開業 20 年になろうというのに、この地下鉄は全くそんな気配はありません。最新アンケートによれば、車輦内の清潔度は 83%、駅は 91% が満足しています。私もヨーロッパの多くの国で地下鉄を利用しましたが、確かにワルシャワの地下鉄はきれいです。最近 CNN が選んだ全ヨーロッパで最も美しい 12 の駅の中に入っています。

その三: 高齢者、身障者、子供連れの母親、車椅子利用者のためのエレベーターは各駅に複数備わっていて、大変評判が高いです。乳母車や自転車の持ち込み、さらに動物(犬、猫)を連れて乗ることも可です。

各駅のホームのデザインがそれぞれ違うので、駅名を知らなくてもどの駅にいるかわかるように工夫されています。これもたった 1 路線 21 駅しかないワルシャワ地下鉄の特徴かもしれません。

ただ、いいことばかりではなく、朝晩ラッシュ時の込みようはかつての日本を思い出します。車内の広告も多すぎてあまり評判がよくありません。しかしこんなことも吹き飛ばしてしまうくらいワルシャワ市民

は地下鉄が好きで、もうこれ抜きでの移動は考えられないという人がたくさんいます。

### 「ラジオ深夜便」と岡崎恒夫先生

ポーランドの言葉も文化を知らないまま、主人について曇り空のもと落ち葉の舞い散るワルシャワの街に足を踏み入れたのは、1976 年の秋でした。当時のポーランドは社会主義国家であったため、自由な日本からまいりました私は種々の習慣の違いに驚くことの多い毎日でした。そのようなときワルシャワ大学の岡崎恒夫先生と知り合い、ワルシャワで生活するにあたっての必要な情報をいろいろ教えていただいたおかげで、一年間のワルシャワ生活を無事に楽しく送ることができました。

あるときふと NHK の深夜の FM 放送を聞いていたら、ワルシャワの岡崎先生の歯切れの良い、懐かしい声が聞こえました。海外リポーターとしてワールドネットワークを担当されていることを知りました。それ以来、この放送を必ず聞いています。放送予定は月刊誌『ラジオ深夜便』で分かります。

栗原朋友子

## 新シリーズ《ポーランドからの便り》



# 日本に親近感を持つ ポーランド人

松本 照男

### 1. 桜の花咲く国、日本という美称

日本の経済ミッションなどがポーランドにきて、パーティーなどの折り、ポーランド側の挨拶の冒頭で「桜の花咲く日本からお越しの皆様を心より歓迎いたします」という表現にしばしば出会います。単に《from Japan》ではなく「桜の花咲く国」という美称で、ポーランド語では《z kraju kwitnącej wiśni》といいます。他の欧米諸国のどの国が日本をこのような美称で呼んでくれるでしょうか？

わたし自身このような表現に何百回となく出会い

まつもと てるお 1942 年、埼玉県生まれ。明治大学法学部卒、ポーランド政府奨学金を受けて留学、ワルシャワ大学大学院ジャーナリズム研究所修士課程修了、同政治学研究所博士課程中退。ワルシャワ在住のジャーナリストとして活躍。



ましたので、あるときそういうポーランド人に「あなたはなぜ日本をそのような美称で呼ぶのですか？」と聞いてみました。「なぜといわれても困りますが、昔

から日本のことはそう表現するものだと、知らぬまに頭に入っています」というのが圧倒的多数の答えです。ポーランド社会のなかに、なにやら漠然とした親日感情があるのは肌で感じますが、それがどこからくるのかは、充分判らないままでした。

さあ、それからがわたしの探索の旅の始まりです。キーワードともいえる「桜の花咲く日本」を手がかりに、1970年代に各層のポーランド人に聞きまわり、図書館や古文書館で書物や雑誌、写真などをいろいろ調べてみました。

## 2. 親日感情の源泉

ポーランド人が日本に親近感をいだく源泉ともいえる4つの事項について簡単にご説明します。なお、日本とポーランドの正式な国交樹立は1919年3月ですから、それ以来の両国の交流期間は(戦後の国交断絶期間も含めて)わずか95年です。

### 1) 日露戦争の影響

まず日露戦争の影響を「敵の敵は味方」という言葉で説明したいと思います。当時、ポーランドは帝政ロシア(…ばかりではありませんが)の圧政に苦しみ、ポーランド人にとってロシアは、いわば不倶戴天の敵でした。当時は日本にとっても、ロシアは(いまや死語でしょうが)「仮想敵国」でした。つまり、広大なロシアという「共通の敵」をはさんで、ポーランドと日本は隣国同士だったわけです。

そうした状況のなかで、近代ポーランド史で最大の英雄、あるいは統治者と評価されるユゼフ・ピウスツキ(1867-1935)=写真1=という軍人・政治家が、日露戦争開始5ヵ月目の1904年7月、密かに日本を訪れ、日本軍部に、ロシアに対抗する「日ポ軍事同盟」を提案しています。のちにポーランドの独立を達成し元帥・国家元首となったピウスツキの日ポ軍事同盟案は、このときは実現しませんでした。かれは日本側の対応に終生恩義を感じ、後年、日露戦争で軍功のあった日本軍将官51名に高位の



写真1: ユゼフ(左)/ブロニスワフ(右)・ピウスツキ

軍事勲章を授与しました。その滞在時に通訳を務めた川上俊彦は、初代ポーランド駐在大使となり(在任期間:1921年5月-1923年2月)。

ちなみに、ユゼフの兄ブロニスワフ(1866-1918)=写真1=は、ロシア皇帝暗殺の陰謀に加わったとして、弟とともに樺太(サハリン)に15年間の流刑になり、刑期終了後はサハリンや北海道でアイヌをはじめ少数民族の研究を行い、多量の写真や音声資料(ろう管)を残しました。また樺太アイヌの酋長の姪を娶り、その子供たち(息子と娘)は戦後北海道に移住し、そのご家族は現在も日本で暮らしておられます。その子孫の木村さんご一家は、ポーランドを訪問してピウスツキ家の子孫の方とも交流しております。昨年10月には、1903年夏にブロニスワフがアイヌ調査のため滞在した白老に、ポーランド政府によってかれの顕彰碑が建立されました。

ロシア軍のなかには何十万人ものポーランド人が徴兵されており、日露戦争で日本軍の捕虜となったロシア兵約8万人のうち約20%(1万6千人)はポーランド人といわれます。捕虜たちは四国の松山を中心に日本国内28ヶ所に收容されましたが、日本側の尋問に多くの捕虜が「わたしはポーランド人だ」と名乗り出たとのことです。この事態に驚いた日本側はポーランド人をロシア人と区別して收容し、丁重に扱いました=写真2=。こうした対応には、捕虜の取り扱いを定めたハーグ条約(1899年)の精神にのっとり、国際社会で日本を文明国として認めさせたいという思惑もあったようです。

日本側の思惑はともかく、日本での捕虜生活に多くのポーランド人はよい印象を持ったようです。祖国へ帰還後、多くの人々が書いた「捕虜滞在記」などたくさんのお話を読んでみると、「サムライ魂あふれる日本人」「恩義にあつい日本人」等々、亡国のポーランド人捕虜を丁重に扱った日本人に対する感謝や恩義の記述があふれております。

1982年、現役ジャーナリストだったわたしは、前年にポーランドに戒厳令をしいたヤルゼルスキ將軍の首席政治顧問で、グルニツキという方にインタビューすることができました。雑談になって、同氏は「わたしには夢があります。乃木將軍や東郷元帥の伝記を書きたいのです」と語りました。よく聞いてみると、グルニツキさんの伯父さんが捕虜として日本で過ごし、子供の頃には日露戦争と日本滞在中の話は何十回も聞かされ、日本へ格別の思いをいだいて育ったのだそうです。

また、旧体制時代に在野のインテリゲンツィアの代表的存在だったストンマさん(数年前に亡くなられました)も、伯父さんが豊橋で捕虜生活をしてお



写真2左:ポーランド人捕虜が收容された松山・雲祥寺

写真2右:松山・御幸町のロシア人墓地  
ポーランド人の墓碑が12基ある

り、戦間期にヴィルニユスの週刊誌に連載した「捕虜滞在記」の切抜きを読ませていただきました。

日露戦争に関連して、もうひとつお話ししておきたいのは、大国ロシアが極東の小国日本に敗北したことが、ヨーロッパ大陸に心理的にはマグニチュード7か8という激震をもたらしたことです。つまり帝政ロシアの屋台骨に緩みが生じ、ヨーロッパの既成の体制に大変革がおこるかも知れないという予感が沸き上がったのです。ウジュでは帝政ロシアに対する市民の大反乱がおきました。独立を失っていたポーランド社会のなかに、日本という国の光が輝くばかりの明るさで差込み、ポーランド人に希望をあたえ、将来への明るい展望をもたらしたのです。このインパクトはまことに強かったようです。

## 2) 第一次大戦のドイツ人捕虜

つぎは第一次大戦のドイツ兵捕虜の話です。ご承知のとおり日本は戦争末期に参戦し、中国のチンタオ(青島)に駐留するドイツ軍を攻めて4千数百人を捕虜にしました。

かつてポーランドは近隣の三大国、ロシア、ドイツ、オーストリアに三度にわたり国土を分割併合され、1795年には全土を併合されて国の独立を失いました。現在のポズナンも、ドイツ(当時はプロイセンといいました)に併合されました。

ポズナンからドイツ軍に徴兵された多くのポーランド人の一人、クレメンス・ヘルフネロフスキ(1892-1971)さんは、チンタオでドイツ兵として日本軍の捕虜になりました。捕虜たちは四国の松山や丸亀、のちには坂東に收容されましたが、当時、日本は文明国と評価されたいという願望からでしょうか、捕虜の取り扱いは寛大だったようです。

捕虜たちは無聊をなぐさめるためスポーツや音楽にいそしみました。日本人はかれらの器械体操の演技に神業をみて、器械体操のグループに日本人への指導を乞い、たちまち優秀な日本人体操

選手が何人も育ちました。ついには3ヵ月にわたる模範演技の日本全土巡回公演が組織されました。

この器械体操グループのチーフがポズナン出身のクレメンスさんで、日本の器械体操の生みの親はポーランド人だったといってもよいでしょう。1918年に独立を回復したあと、クレメンスさんは体操選手、のちにはコーチや国際審判として活躍しました。同氏にとって日本は終生忘れられない希望の地だったようです。東京オリンピックのときには審判の一人として来日したそうです。

ちなみに、最近の日本では年末の恒例行事となったベートーベンの第九を、日本ではじめて演奏したのは、坂東收容所のドイツ将兵捕虜でした。

## 3) ロシア革命とポーランド蜂起軍

1917年のロシア革命後、ロシアには内戦の嵐が吹き荒れ、各国列強のシベリア介入があったことは、歴史の授業でよくご存じと思います。日本軍もその列強のひとつでした。

当時シベリア在住のポーランド人が蜂起軍を組織して赤軍(ロシア軍)と戦いましたが、戦闘に破れ、約8千人の兵士が赤軍に降伏します。内戦の最中ですから、赤軍も捕虜の処遇にこまり、最終的には日本軍が赤軍と交渉して、数千人のポーランド兵を軍用列車で大連まで輸送し、そのあと船で祖国に送り返しました。こうして日本軍の保護のもとに祖国に帰還したポーランド兵が、123年ぶりに独立を回復したポーランドの軍隊の中核となるのです。

このとき日本軍の援助で祖国へ帰った兵士の一人に、第二次大戦が始まったとき首都ワルシャワ防衛軍の司令官を務めたチューマ将軍がおります。かれは戦間期には、つぎにお話する、同じくシベリアから帰還した孤児たちや、駐泊日本武官とも、とても親しいお付き合いをしていたそうです。



## 4) 日赤によるポーランド孤児救済

日赤によるシベリアからのポーランド孤児の救済は、100年近い日ポ交流史のなかでも最もインパクトの強い出来事のひとつで、ポーランド社会にたいへん強い印象をあたえ、ポーランドにおける親日感情の最大の源泉といえるかもしれません。

1920(大正7)年と22(同9)年に、日本赤十字社が国際難民救済事業の第一号として、1歳から16歳のポーランド孤児765名を、シベリアから敦賀経由、東京、大阪を経て、123年ぶりに独立を回復したポーランドへ送り返したのです(写真3)。孤児たちを日本船で祖国へ送り返すまでの詳しい事情は、それだけでゆうに一冊の書物になりますので、別の機会に譲りたいと思います。

救済事業の背景には、1920年にシベリア出兵した日本軍がウラジオストックを中心に22年10月まで駐留しており、軍用船の利用が可能だったこと、またポーランド人の救済委員会会長の日本外務省や日赤に対する救助請願に応じて、日本の善意を国際的にアピールしたい状況にあったこと、そして純粋に慈悲の念から積極的に援助に応じる気持ちもあったと思われます。

独立を回復したばかりで、荒廃した国土復興の意気に燃えるポーランドの社会状況のなかで、帝政ロシアに反抗して流刑になったポーランド人の子孫の子供たちが日本の援助で母国に戻ってきたことに、興奮しないポーランド人はいなかったでしょう。国の将来を担う子供たちは国の宝、という気分が国中を支配したのも当然といえましょう。

当時の新聞雑誌類を図書館や古文書館、知人の蔵書などで数多く読みましたが、「義侠心あふれる日本人」「サムライ魂の日本民族」「子供を国の宝として育てる日本人」「桜の花咲く国からの帰国者たち」等々、日本への賛美や感謝の文字があふれています。



写真3: ポーランド孤児(日本赤十字社所蔵)

ポーランドの人々は1904-05年の日露戦争のあと1920年代中頃までに、「桜の花咲く国」日本への熱い思いを胸の底に深く植えつけたのです。日本の援助で母国へ帰還した孤児たちは成人しても、戦間期はもとより、第二次大戦から戦後の共産主義時代になっても、恩義あふれる日本について、家族や友人知人に語り続けました。1922年に1歳だった人は、いま生きていれば92歳です。当時10歳以上で日本の記憶を強く持つ人々はもうほとんどが亡くなりましたが、残された子供や孫たちは、父母や祖父母から日本滞在の話を、目を輝かせて聞いたと、たくさん証言しております。

その由来を知らないままに「桜の花咲く日本」と表現するポーランド人の心の底には、代々受け継がれてきた、往事の日本への感謝や賛美の念がDNA(遺伝子)のなかに刷り込まれていて、日本人をみるとその遺伝子が騒ぐのかもしれません。

こうしたポーランド人の親日感情は、たぶんに「片思い」的などころもあるようです。一方的にポーランド側から惚れ込まれた日本側には、最近でこそ「ショパンの国」というイメージはあるものの、一般には、幅広い親ポ感情があるとは思えません。

とはいえ、「森へ行きましょう、娘さん」をポーランドで最もポピュラーな民謡とは知らずに歌ったり、「向こうの森で鳴いてるカッコウ…」の歌を知っていたり、ショパンの一節「雨だれ」を学校で習ったり、1800年代に帝政ロシアに反抗して蜂起したときの流行歌「ワルシャヴィアンカ」を——70年安保の頃——学生が歌ったりと、普段あまり意識しないのに、ポーランドのものが日本社会に結構浸透しているのも確かです。

ともあれ、ポーランドのように、いたく日本びいきの国があることも知っていただきたいと思います。

## 写真出典

写真1左(Jozef Pilsduski. Photo 1930): ウィキペディア日本語版; 同右(1903年函館、井田写真館にて): ピウスツキの仕事—白老における記念碑の除幕に寄せて、井上紘一編集責任、北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター、2013.10

写真2左・右(稲葉千晴撮影): 日本におけるポーランド人墓碑の探索、エヴァ・パワシュェルトコフスカ、稲葉千晴編集、ポーランド文化・民族遺産省文化遺産局、ワルシャワ、2010

写真3: 日本赤十字社と人道援助、黒沢文貴、河合利修編、東京大学出版会、2009.11